ヤスクニ通信　No.254　2021 年 5 月 21 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　https://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）　会場　NCC フリースペース（新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 24 号）

ヤスクニ・レポ　254
沖縄においてキリストにあって一つであるということ

川越　弘（日本キリスト教会沖縄伝道所牧師）

観光客であふれている沖縄空港

一昨年までは、毎日、那覇空港は観光客で溢れていた。年間 1000 万人を超える観光客であった。青海原に広がる南海の島、コバルトブルーの海と空、白砂の浜辺とさんご礁、亜熱帯の気候と多様な植物と一年中色鮮やかな花が咲いている。イチャリバチョウディ（出会えば兄弟）の沖縄の人々との出会いを楽しむのであろう。しかし沖縄の人々が日本の観光客に本当に知ってもらいたいのは、今に至るまで日本の犠牲になっており、今も差別を受けている沖縄とその歴史である。

日本の罪責の立場から

私たち日本人は、琉球処分（不必要なものを処分する）から今日まで、上からの目線で沖縄を見下してきたのではないか。今もその意識は変わっていない。日本政府の同化政策と日本人民衆の同化意識があるからだ。日本人と沖縄の人を混ぜ合わせて、日本の論理で沖縄を見つめるのである。「沖縄が日本とほぼ同じになってきたのは、それだけ沖縄が成長してきた」と人は言うが、それこそ植民地意識が根底に横たわっているのではないか。植民地の加害者としての立場に自分がいるということ、その中にあって私が沖縄に存在しているという、このことをしっかりと捉えて行かなければならない。

沖縄の人たちの本当の願い

沖縄の人たちの本当の願いは、沖縄の痛みを日本人の痛みとすることにある。私たち日本人には、沖縄を踏みにじった者であるという自覚が欠けている。少しはあるとは思っていても、全く足りない。沖縄の人々が本当に望んでいることは、日本人が沖縄の人々以上に沖縄の痛みを理解して欲しいということである。しかし現実はそうではない。沖縄の人々の叫びを他人事のようにして見るからだ。ここに私たち日本人の課題がある。沖縄の人々の痛み以上に日本人である者としての罪を深く覚えるということ、これは私自身の課題であり、日本人全ての課題である。日本人はこのことを、これまで真剣に考えて来たであろうか。少なくとも私自身、これまで真正面に向き合って来なかったのである。

基地反対闘争に参加し共闘して、沖縄の人たちの心の中に入ったと、簡単に思ってはならない。そうして自分の責任を果たしたかのような免罪符となってはならない。私たち日本人に問われているのは、「あなたがたは、沖縄戦を命じた日本政府に、そして沖縄住民の土地を強奪した米国政府に、無意識的・半無意識的に同調し加担してきたではないか」と言う言葉である。そのためには、沖縄に痛みと苦しみを与えた加害者であることを強く認識することだ。沖縄の人々が日本人に願っていることは、日本人こそが沖縄の痛みを沖縄の人以上に深く自覚して欲しい、ということだ。これは教会の課題である。教会の使命・ミッションである。キリストに仕える者の務めであると、私は考える。

そのためには沖縄の歴史を学ぶことであり、薩摩侵略・琉球処分・明治の植民地政策・沖縄戦・戦後と日本復帰と今日の基地問題を正しく認識することにある。さらに沖縄戦を経験した人々の声、現在の沖縄の人々の声を聞くことだ。沖縄だけでなく、今も天皇制構造思考の下でアジアの民衆を支配し続けてきている日本の国家権力の剥奪の歴史を知っていながら、それに批判しないで黙認、あるいは同調している日本人である己の姿を知ることである。

沖縄の人たちは、自分のアイデンティティが何であるかを求めている。「国籍は日本にあるが、日本人になりきれない」と言う人が多い。ある日本人が私に言った。「沖縄の人を同じ日本人として見なければかわいそうよ」。そこには無意識の同化主義がある。

キリストにあって一つであるということ

沖縄の人と日本人、異なる歴史を背負って生きる者同士が協力して一つのものを建て上げるにはどうすべきか。とくに教会は何をすべきか。日本人が沖縄でキリストに仕えることとどう関連するのか。

キリストの体なる教会と結びついている私たちは、沖縄の兄弟姉妹と共に礼拝を行い、天に国籍があると信じている。教会はキリストが頭とし私たち信仰者がその肢体となっていることを基盤にして、沖縄人（ウチナンチュウ）と日本人（ヤマトンチュウ）の在り方を考える。「キリストにあって一つである」ことは、互いに異なることを認めることにあるからだ。沖縄の人々と日本人は、それぞれ異なった歴史と文化を背負って生きている。混ぜ合わせたり同化したりするのではない。混ぜて同化することは、相手の領域の中に入りやがて日本の側に入れ込む。これが植民地支配者意識である。

それに対して、三位一体の神認識に立つとき、それぞれが異なる独自性と個性と自由に生きることに推し進められる。沖縄の立場があり、日本の立場があるという認識である。日本の立場とは、日本人が侵略した罪責を悔い改め、沖縄の自由と独自的個性を尊重し、沖縄の人々の傷みを傷むことにある。沖縄の立場とは、差別され虐げられている自らの存在

を訴えることにあると考える。命どう宝の魂（マブイ）に誇りを持ち、沖縄の歴史に責任を担い、ウチナンチュウの尊厳と自己決定権を樹立し、日本から踏みにじられ差別されてきた不公正さを訴えることにある。ヤマトンチュウは、日本の歴史の真実に目が開かれることである。それは、自分の中に浸透し巣みついている、天皇宗教という日本的ナショナリズムと靖国の亡霊と闘い、日本の加害の歴史を深く自覚し、自分が加害を与えた者であるという痛みをもって、償いの生き方をすることにあると信じる。

そこから、異なる者同士が一つのものを建て上げることにつながる。両者混ざり合って生きることではない。これまで、ヤマトンチュウは一つになろうとして、ウチナンチュウの領域まで犯してきたではないか。たとえ良心的な思いで行動したとしても、これが植民者の行動となってきたのだ。互いに異なる歴史に生きる者同士が、それぞれ自分の担っている歴史の上に立って、両者生かし合うことである。そのために互いに尊重し、尋ね合い、問い合い、刺激し合うことであって、屈服したり、押さえたり、隷属化したりすることではない。私たち日本人は、沖縄の問題を正しく日本に伝えるという責任がある。沖縄の問題を沖縄の人々が語り伝えることは必要である。しかしそれ以上に、日本人が沖縄の人々の傷みを、沖縄の人々以上の深い傷みと悲しみをもって、日本に向けて語ることである。

２０２１年４月１６日例会奨励「平和をつくるもの」

マタイの福音書５章１～１０節　山川暁（日本キリスト教会東京告白教会長老）

靖国神社の春の大祭を控えて、改めて靖国神社について考える必要を覚えさせられます。亡き西川重則長老が常に口にされたのは「平和をつくる者たちは幸いである」でした。しかし、平和を作ることと、靖国神社は相容れない関係にあります。靖国神社は戦争の神社であるからです。現在の靖国神社は単なる宗教法人にすぎません。しかし、同時に靖国神社が天皇の神社であり続けていることも事実です。大祭には天皇の勅使が靖国神社に遣わされ、かつ境内には天皇が例大祭を裁可したことを示す「勅裁如件」の文字が掲げられています。靖国神社が天皇の神社であることの証拠です。

ヤスクニの集いは靖国法案に反対する活動を継承するものとして位置づけられています。何故教会は法案に反対したのか、それは戦前の苦い経験があるからです。戦前の教会が靖国神社とどの様に対応したのかを示す「安国の英霊」と題した資料があります。その抜粋を紹介します。

南海の涯に、大陸の奥に大君に命を捧げ奉った忠誠勇武の英霊二万五千を迎え祀る招魂の儀に、帝都は今厳粛の気をみなぎらしている。

戦はいよいよ深刻化し、決戦につぐ決戦ときびしい戦ひは展開される今日、国民の生活は捧げられた血によって護られているのである。この血の尊さは英霊を神と祀る日本の伝統のみがよく知る所である。国に捧げられた血を尊しとする精神は他国にもあるであらう。然しこの血に最高の意義を見、祭神と讃へる精神は、我が日本をおいて外にはない。

これは国民のうちに、かうした血に高く深い意味を見出し得る国民性の優秀性を示していると同時に，否寧ろ尊い血を捧ぐる人々の尊い心ばえが、戦場に於て他国人の知らぬ高さにまで昂揚して、国民をして跪拝せしめずんば止まらぬ尊さを現しているからである。この尊い殉国の血を靖国の英霊として祀る心がおこるのは当然である。

基督教は血の意義を最も深く自覚した宗教である。ヘブル書の記者は「永遠の御霊により瑕なくして己を神に捧げ給ひしキリストの血は我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事へしめざらんや」（ヘブル書9：14）と云ひ，血の意義を顕揚している。其基督教はこの血の尊さに醒めさせられて新しくされたのであることはあらためて申すまでもない。

血の意義の深さを伝統として有した初代日本基督教者が、キリストの血の意義に初めて触れた時心躍ったのは当然である。キリストの血に潔められた日本基督者が、護国の英霊の血に深く心打たれるの精神的意義に共通のものがあるからである。血の意義の深い自覚に共通なものが潜み堪へられているからである。

靖国の英霊を安じる道は敵殲滅の一途あるのみである。一毫のすきなき誠忠の思ひもて、与へられた立場から奉公してゆかねばならない。我々のたぎり立つ血のはけ道は、英霊の血と深く相通じている。（「日本基督教新報」1944 年 4 月 11 日）。

戦前の日本のキリスト教会が靖国神社の春の大祭に際して表明した無残な文章です。私たちはこの国の教会が靖国神社に対して公表したこうした事実を忘れてはならないのです。そして、誤り犯したその歴史から学んでいかなければなりません。その意味で、ヤスクニ探訪には大きな意味があるのです。

宗教法人靖国神社の規則の第3条には靖国神社の目的として「祭神の遺族、その他の崇敬者を教化育成する･･･」と記されています。教会はこの事実に目を向けなければなりません。平和を作ること、それは靖国神社が取り込もうとする人々に福音を伝え、イエスさまを証しすることにも通じているのです。

「平和をつくるもの」という聖句で、「平和」と訳されているギリシャ語には「幸福な」とか「至福な」という意味があります。また「平和をつくり出す人たち」には「平和を生じせしめる者」、「平和を来たらす者」という意味があります。

キリスト者は「平和を生じせしめる者」であり、また「平和を来たらす者」であるのです。今日、キリスト者の靖国神社への関心は年を追って薄まってきているように思えます。しかし、ヤスクニの集いには、今後も引き続き、靖国神社から目を離さず、靖国神社が戦争の神社であることを訴え続けて行かなければならない使命が与えられているのです。